

前九年合戦の原因は、安倍氏がエミシの出自だったかどうかではなく、むしろ、在庁官人としての働きの問題だったのではないかとこのことである。

在庁官人は便利な存在である。受領にとってみれば、彼らに任せておけば、ある程度必要なことはやってくれて、懐も潤してくれる。

しかし、そのまま放置しておく、その地域は受領の管轄ではなく、在庁官人の国、在庁官人の支配領域になってしまふ。事実そうなりつつあった。そこが源頼義が危惧したところではないか。

つまり、在庁官人と受領官との関係の極端な形が、前九年合戦として現

「支配の矛盾」合戦の火種

れたのだと思う。日本全国で同様の問題は発生していた。在庁官人が誕生し、次第にその地域の支配権を握っていく。そこに受領がやってくる。受領と在庁官人の間の契約関係がこじれれば訴訟さたになるし、武力衝突ということも起り得る。そういう現象の一つの現れが、前九年合戦だったのではないか。

ただ、受領官と在庁官人の間のトラブルの規模が、他の地域と違って大きかった。なぜなら、その背後に巨大な経済的利権が潜んでいたからである。これが事態を大きく

した重要な問題だった。そしてここでもう一つ、やはりエミシの世界であったということに注目しなければならぬ。エミシも農耕を営んでいたが、中央政府が望んだものは米ではなくて、

交易で得られるさまざまな珍奇な物品だった。それを供給するためには、エミシ首長層との個人身支配の形成が必要だったという特殊性があった。

さてその上で、基本的に私は、前九年合戦の原因因というのは、受領官と在庁官人の間の矛盾であったと考える。日本史

一般の問題であって、特に陸奥国に限ったことで問題も要因の中にあっ

と考えている。受領官は、在庁官人としての安倍氏が力をつけ、自分のところにきちんと富を運んでくれればそれでいい。しかし、落ち着いて考えると、安倍

氏のような存在は危険な芽でもある。実質的にその地域を支配しているのが、在庁官人だった。安倍氏が在庁官人だった時、実はもう鎮守府胆沢城の機能は低下、あるいは停止していたと考えられる。

つまり、在庁官人安倍氏の拠点で、政治の中心地域になっていた。源頼義は、そこに入れなかった。どの程度本当かは分からないが、陸奥話記には「鳥海柵というのはよく聞けれど、その実態を見る事ができなかった」と源頼義が発言したと残されている。

金ヶ崎の国指定史跡

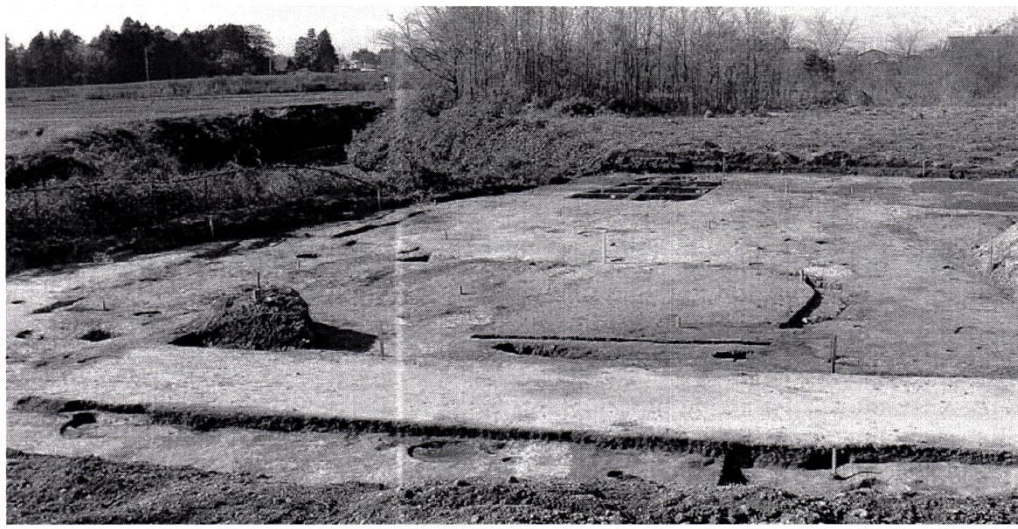
鳥海柵を知る

— 2014 シンポジウムより —



基調講演 大平 聡氏 (宮城学院女子大教授)

「鎮守府胆沢城から鳥海柵へ」 VII



四面廂付きと廂無しの掘立柱建物跡や竪穴建物跡、周囲を囲むように「字状に掘られた堀などが検出された原添下区域南東部。11世紀中ごろのもので、安倍氏が多賀城管轄の国府領へと勢力を拡大した時期と重なり、地方政治の場から軍事的性格を強めていった